

お茶高 SSH 企画「研究者にインタビューしてみよう」は、様々な分野で活躍する研究者に生徒がアポイントをとってインタビューし、そこで得たものをまとめ、全校生徒に向けて発信するプロジェクトです。1 年生 5 名が 8 月 5 日、東京大学大学院法学政治学研究科 平田彩子教授にインタビューした内容をご紹介します。

○平田 彩子先生(東京大学大学院法学政治学研究科教授)のご研究

平田彩子先生は、東京大学大学院法学政治学研究科教授として、法律が実際の社会の中でどのように運用され、機能しているのかを明らかにする研究・教育に取り組んでいらっしゃいます。特に、環境規制などの法令を実際に運用する地方自治体の行政現場に注目し、法律の条文だけでは明確に定めきれない「あいまいさ」が、現場の職員による判断や工夫を通してどのように具体化されていくのかを研究されています。職員への聞き取りや行政現場の調査から得られた豊富な知見をもとに、「作られた法律が、現場でどのように解釈され、使われ、生きたルールとなっていくのか」を丁寧に捉えている点が研究の大きな特徴です。法律を単なる条文や制度としてではなく、社会の中で人々によって運用されるものとして捉え、その実態を明らかにすることで、より実効性のある法制度や、よりよい社会の仕組みの実現に向けて研究をされています。

○インタビューで伺ったこと

Q 「法学部」と聞くと弁護士の道に進むイメージが強いですが、なぜ研究者の道へと進んだのですか？

当時は、「女性であること」を今以上に強く意識していました。だからこそ、性別にかかわらず、自分の仕事や能力をきちんと評価してもらえる環境で働きたい、という思いが強かったんです。当時は、男性社員が集まる「たばこ部屋」で、仕事上の大切な情報が共有されたり、そのような場で重要なことが事実上決まったりすることもありました。そうした場に入りにくい女性が、知らないうちに不利になってしまう。そんな働き方ではなく、できるだけ公平に評価される環境で働きたいと考えていたため、民間企業への就職はあまり考えていませんでした。

弁護士という仕事にも大きな魅力を感じていましたが、自分には、一つの問題をじっくり考え、調べ、掘り下げていく研究者の方が合っているように思いました。それに、何より「研究するって楽しそうだな」と感じたんです。もっとも、当時は「研究者なら、弁護士より少しは自分の生活をコントロールできるかもしれない」と思っていたところもあります。そうしたいくつかの理由が重なって、最終的に研究の道を選びました。

Q 「研究者」という世界において、男女の不平等は存在しますか？

分野によると思います。例えば、「研究室に何日もこもる必要がある」といった、時間の制約が大きい研究では、男女で有利・不利が生じることもあるのではないのでしょうか。私自身は個人で進める研究が中心だったので、そうしたことはあまりありませんでしたし、法学の研究においては、研究そのものに大きな男女差はないと感じています。ただ、どのようなキャリアを選んだとしても、20代後半から30代前半は、仕事の上でとても大切な時期です。そして、それがちょうど子育ての時期とも重なるんですよね。だからこそ、限られた時間を仕事と子育てにどう配分し、どちらを大切にしていくのかは、多くの人が悩むところなのではないかと思います。

Q 法学部に向いているのはどのような人ですか？

社会の出来事に興味がある人、新聞やニュースを見ながら「どうしてこうなっているんだろう」と考えるのが好きな人には向いていると思います。法律というと、条文を覚えるイメージがあるかもしれませんが、実際には、その法律が社会の中でどんな役割を果たしているのか、人々の生活にどんな影響を与えているのかを考えることが大切です。それから、文章を読んだり書いたりする機会がとても多いので、国語力も重要です。長い文章を正確に読み取ったり、自分の考えを筋道を立てて相手に伝えたりする力は、法律を学ぶ上でも研究する上でも欠かせません。



Q 研究の中でインタビューをすることが多いとおっしゃっていましたが、インタビューの中で大変だと感じることはありますか？

インタビューをすること自体はとても楽しいのですが、帰ってから内容を整理してまとめるのが大変ですね。録音された自分の声を何度も聞いているうちに嫌気がさしてきたり、「なんでこれを聞かなかったんだろう！」と後になって気づいたりすることもあります。また、インタビューの結果を考察するときには、グラフや統計資料を分析するのは違って、一人ひとりの言葉から共通点や意味を見つけ出し、そこから何が言えるのかを考えていく必要があります。すぐに答えが見えるわけではないので、粘り強く考え続ける「学術的なスタミナ」が必要になります。そこは少し大変ですが、研究の面白いところでもありますね。

Q 「法律」と聞くと遠い存在に感じてしまいますが、私たちが触れる機会がありますか？

今は『こども六法』(山崎聡一郎著、弘文堂)など、子どもにも分かりやすく法律を紹介した本がありますし、法務省のウェブサイトにも子ども向けのページがあります。法律というと少し難しく感じるかもしれませんが、実は私たちの生活に関わる身近なところに、法律を知るきっかけはたくさんあります。興味を持ったら、まずは自分が面白そうだと思うところから、ぜひ探してみてください！

Q これから進路選択をしていく私たち高校生へアドバイスををお願いします。

今、目の前のことを頑張ることも、将来について情報を集めることも大切です。でも、どれだけ考えても正解が分からないことはあります。最後には「えいや」と思い切って決断する時が来るんです。そして、一度決めて走り出してみると、そこで初めて見えてくるものや、思いがけない出会いや幸運がきっとあります。「成功」は、どの道を選んだかだけで決まるものではありません。実際に何か決めてそれに向けて走り出すと、必ず新しい発見や、思いがけない幸運に出会うはずです。「成功」は決断した時ではなく、決断した道をどう歩むかで決まります。努力を重ねながら、自分の選んだ道を正解にしていってください！

*** 今回のインタビューでは、「研究者」という職業の話から貴重な法社会学のお話まで、幅広くお話を伺うことができました。お忙しい中、私たちの質問に一つ一つ丁寧に答えてくださった平田先生、本当にありがとうございました。**